

プログラム

まとめ、謝辞

日本アイ・ビー・エム株式会社 取締役 廣瀬 貞夫



日本IBM、九州地区を担当しております廣瀬でございます。本日はご多忙の中、IBM環境シンポジウムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。総参加者470名を超す、すばらしいシンポジウムになりました。閉会に当たり、ご参加いただきましたみなさま、講師の方々、準備に当たっていただきました北九州市のみなさまに、心より感謝の言葉を述べさせていただきますと思います。官営八幡製鉄所の溶鉱炉に火が入れられて今年でちょうど100年目を迎え、重工業都市 北九州市から環境未来都市へと、産業・市・学校、それと市民が一体となって作り上げられておられる北九州で、末吉市長ご自身の環境への並々ならぬ取り組みを拝聴することができました。また、今のパネル・ディスカッションでも、九州ヒューマンメディア創造センターの合田理事長様、新日鉄の川崎部長様、東陶機器の星加専務様にご参加いただき、環境への取り組みの貴重なご意見をいただくことができました。北九州市は、全国に先駆けてスタートしましたエコタウンのモデル都市として、PCBの処理技術など環境の先端技術および人材の集約された都市であると、私どもも認識しました。この技術と地理的優位性を活かし、北九州市は環境情報交流のアジア諸国への窓口として、更なる発展が期待されています。アジアに生産拠点をもちます私どもIBMも、この機

会を通じて、アジア諸国が抱える環境問題の解決と一緒に考えていきたいと願う次第です。また、北九州市と非常によく似た歴史を持ちますアメリカのピッツバーグ市の歩みと環境の取り組みをテーマとしたカーネギー・メロン大学のジョエル・タール教授の講演は、参加者の皆様に貴重な示唆をご提供できたのではないかと思います。IBMは1967年に環境ポリシーを制定し、環境保全への取り組みを全世界167カ国で実践してきました。本日、社長の大歳、及び副社長の丸山の方から、このIBMの環境への取り組みの主なところをご紹介させていただきました。更に詳しくご理解されたい方は、日本IBMの前の環境委員長で、パネルディスカッションに参加しました山本と、神戸大学の國部教授の共著「IBMの環境経営」が東洋経済新報社から2カ月前に出版されていますので、ぜひご参考いただければと思います。IT企業として当社が果たすべき役割の1つとして、技術顧問の石田の講演しました、「インフォメーション・アクセシビリティ」は、情報格差をなくし、より多くの人に情報化のメリットを享受してもらえようという、「環境と人への優しさ」を一体として捉えるIBMの考え方です。日本IBMでは「社会と共に」を社是としていますが、環境への取り組みも社会の要求に応えるものとして、積極的に推し進めることが大切であると考えています。この環境シンポジウムは、IBMのこの考え方を実践する場の1つとして、「社会と共に」環境に取り組み、進めることをあらためてお約束致します。本日は長い時間、そしてご多忙の中シンポジウムに最後までご参加いただきまして、誠にありがとうございました。高い所からではございますが、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。